

趙 15P
 春 379P
 71300P
 趙 477P
 春 411P
 東史 135
 前 230年
 趙 247
 趙 3128-23
 趙 1577

昭一 天下を統一すると秦王政は大臣たちにより
 トル 天下を統一すると秦王政は大臣たちにより
 かっア言った。 暴乱をいずめた。これ祖宗の神霊による
 し 暴乱をいずめた。これ祖宗の神霊による
 かの 1094 ほうらん 暴乱をいずめた。これ祖宗の神霊による
 ものであり、六国の王達は既にみな罪に伏し、天下
 が大いに平らいだ。いま王の名号を改めな
 ければ、この成功をたたえ、後世に伝えるに
 とま できないであろう。よろしく議して帝号
 を定めよ。

秦は前二五六年に周を滅ぼした。その後、さらに韓・趙・魏・楚・燕・斉の順に六国を次から次へ討伐し、ついに天下を余すところなく平定した。
 それが、前二二一年、秦王政が三十九歳の時だった。

(3) 黄河のほとり
 集英社、二四七五
 東洋史辞典に創元新社へ秦の参

2052
 246

求洋数序
358 -
黄河の子と
352
成す
あまね
ニヒニヒ
④1109 7行

黄河のほとり 252^P

黄河のほとり 253^P

1111^P

黄河のほとり 253^P

かくて定められたのが、皇帝と尊号
の1090^年、あわせ用いたものである。
また、皇帝の命を下し、令を詔し、そ
の自称を「朕」とすることになった。
さらに皇帝は制して言った。
「周の時代の論は、死んだ後に、生前
の行為によってつける習わしである。これは
子が父を議し、臣が君を議することであり、
まことにいわれなく、朕の取らざるところで
ある。今よりは論の法をやめ、朕を始皇帝
となし、後世は数をかぞえて二世、三世より
万世に至らめ、無窮に伝えたい。」
このようにして、秦王政は、始皇帝と
称せられ、女になつた。
つづいて、広大な中国の領土をどのように
統治するか、その方策が論せられた。こゝま
での方式によるならば、遠隔の地に「王」を
封じ、封建制度のもとに、司馬・校尉の李斯が反対し
う。しかし、廷尉（司馬・校尉）の李斯が反対し

221
2012
2233年

かんり 官吏
おおねく
すけにわたる、
多く、
かんり 508P
全て2022
ことごとく2022

1.112P

219

かいだい 海内 356

昔のほとり 254

明、集英社、二五二

＊

四頁参照

た。李斯は、こう言った。
「周は同姓の子弟を封じて王としたが、
ちには疎遠となり、ついに仇敵のごとく
唾み合って、周の天子でさえおさえるこ
とができなかった。いま海内（四海の内、国
内）は一統され、ごとき秦の郡県となつ
た。諸公子や功臣を、厚く待遇すれば、そ
れでよい。そもそも天下に異心をいだく者の
無いのが安寧の術であり、諸侯をおくのは
便法とはいえない。」
秦始皇帝は、これを採用した。
すなわち、天下をわけて三十六郡とし、そ
れぞれ中央から官吏を派遣して治めさせ、
郡県制度の直轄とした。郡は、さらに数
十の県に分けられた。
こうして、始皇帝によって始められた中央集
権の体制は、郡県制度とよばれ、その後
も二千年以上にわたって、なかく中国の統
治方式の基本となつた。（世界の歴史③黄河のほとり、松
本雅

3/2
「ことごとく」 ③1107. 破57. 大

党统治国土人民在支配好也

■ いまや始皇帝は、唯一として絶対の専制君主となり、
 地が下、皇帝の統治下に置かれた。そして、統一
 政治を強力に押しすすめる為、重要な改革
 が次々と実施されていった。
 ■ 始皇帝は、貨幣の規格や、度量衡を統一し
 道路を整え、車輪の幅を一定にし、文字を一
 本化した。
 ■ また、李斯を用いて法家思想を重んじた。
 ■ 宮殿が、地震にいとまされたことは、いうまで
 もない。とて、あつた。咸陽は、全帝国の中心
 として、壮大なものでなければならなかつた。
 ■ 宮殿は、みな渭水の北にあつた。一方、上林苑と
 いう大遊園地や、祖先の廟は、みな渭水の南
 にあつた。両者間のは大きな橋がかけられ、
 また宮殿と宮殿との間は、複道という二階建
 ての通路によつてむすばれた。
 ■ 天下の富豪十二万户を、咸陽に移住
 させた。皇帝のひざもとに置いて、監督を容
 易ならしめ、都の繁栄をはかるとしたのであつた。

黄河のほとり 260^P

王利 16^P
大和 426^P

1114^P さらに 1111^P 69

日本でも武器の奈良の大仏 ⑤
をいってか
黄河のほとり 256^P 前頁 13行

他方、人民が武器を持つことを禁止した。
天下の武器を咸陽に集め、これを溶かし、
鐘鐻（鐘など）をかける台の金人（銅
製の大きな人形）十二体つくった。
●金人の重さは、おのおの千石（三十ト）
もあったという。へ「世界の歴史」③黄河の
ほとり、松本雅明・山口修、集英社、二五五
七頁参照）

＊

麗山の陵であつた。
始皇帝は王位につくとこの麗山の陵の工
事をはじめた。そして天下を統一するや、七
十余万の罪人を使役し、地下の湧き水に達す
までの穴を掘らせた。
墓室を銅で作り、その中に宮殿や百官の座
席等をもつけ、あらゆる珍奇な品を宮中から移
し、充滿させた。
死後の世界も、地上にまざる豪華さをもつ

④ 1116P
④ 345P

前180年以降
笑子の童洲

④ 344P

三〇五

三〇五 252
元兵 228
1,115P

せい 1214P
香 (今の山) 香

外周 = 2πr = πD
D = 637m (直径)

かくて
④ 1108P
④ 1118P

丸行

て準備されたの^だあった^さ。
↑↑↑出現した^り馬山陵は、高さ百餘^{あまり}り、
周囲は二千餘、さながら巨大な丘であつた。
(「世界の歴史」(3) 黄河のほとり、^{松本雅明}集英社、
二六〇頁参照)
人間の欲望にかぎりはない。
死後の宮殿までつくつたものの、始皇帝と
て死にたくはなかつた。四十歳をこえて、も
はや年をと^りたくもな^かつた。
始皇帝は、不老長生の薬を求めた。
齊(山東)の海上はるかに言洲^{えんしゅう}という山^{やま}
島があり、その島に不老不死の仙人が住んで
いる。その仙人から仙薬をもらつてきて飲め
ば、不老長生の効果が得られる。
この当時の人々は、そのように信じていた。
とはいえ、だれもが仙人に会えるわけでは
ない。特別な術を修得した者、すなわち方

「とある」 新や再校(1)-332P(タイ11) 228P
③345Pに同文
③3728-3

1116P

③1107P
↓OK

ほうし 2015P

改行

黄河のほとり2/1
改行

士と呼ばれる者達のみか、人間と仙人との仲間たちを務められると考えられていたのだった。
・齊(山東)の方士である徐福は進言して
仙人を探してきたいと存じます
と言った。
・そこで前二二〇、始皇二十七年、徐福に命じ、童男童女数千人を船に乗せ蓬萊山へおもむかせた。徐福はこうして言州(日本)へ達したといい、徐福の墓が紀州の新宮にあると云う。
集英社、二六一頁。「三国志」魏書・方技伝「広群苑」(言州)参照
・もつとも、有明海の北端、背振山脉の南麓に金立山(カナタテ山)とも「雲上山」ともいう。あたりに来投したともいわれている。(第二章「言州」の項において既述)
は、弥生時代前期の半ば頃にあたる。徐福来投の時矣(前二二〇)から四〇年程後の前二一八

巻頭の第3表参照

大電 (はく) 張 (セウ) 申 (セウ) 節 (セウ) 4
徐 (セウ) 福 (セウ) 侯 (セウ) 侯 (セウ)

改訂

の年頃に箕子達が下って来るのであろうか。先のことなど予想もできない今はまだ、当初の弥生人達にとって、長閑な時が続いていたように思われる。

＊なお、史記正義は徐福と記してあるが、史記では徐市と記されている。(「東洋史辞典

創元新社へ徐福」参照)

市でなく、市です。

中部の二画

巾部の一画

さて、始皇帝は、天下を統一してから七年

後(前二一四)に黄河の北方をも占領した。

修築を命じた。

そのころの長城は、土壁を長く連らねたものであり、戦国時代から、各国の国境と、北域

とに築かれていた。

始皇帝は、無用となった秦国内の長城を

改訂

コウモ 7-20 20x21

「とある」 非常 1865 異次 618
① 1116 (現代?)

三國史記 178
坑儒を憎むは
こと

1,119P

213年 631P
こと

ことごとく

天の威

1091

下にならん。さすれば思想の統制を行ふべし。というわけ、始皇帝は、¹⁵²医薬・²⁰³卜筮（うらな）¹⁹⁷⁸・¹¹⁹⁸農米などの書物を除き、民間に伝わる書物をことごとくさしださせ、そして焼く捨てる。こうして実施されたのが、¹⁹⁷⁸いわゆる「焚書」である。これは、¹⁹⁷⁸前二一三年のことである。さらにその翌年、始皇帝は、²²⁶妖言をいふ¹⁰⁶³らして人民をまどわせたり、政治を論じたりした儒者たち四百六十余人を¹⁰⁶³坑に¹⁰⁶³入れた。陽で穴埋めの刑（坑）に処した。これは「坑儒」であって、焚書とともに後世、思想弾圧の典型とされることになる。（「世界の歴史」(3) 黄河のほとり、集英社、二六三頁等参照）
尚、秦始皇帝のこの「焚書」が、¹⁹⁷⁸後年、¹⁹⁷⁸聖徳太子の理想を具現化するに当って、¹⁹⁷⁸常に重要な参考になったのだらうと推察される。¹⁹⁷⁸つまり、¹⁹⁷⁸秦始皇帝が焚書・坑儒を行なったというその詳細は、後代へ伝えられ、大いに¹⁸⁸³非難士

前巻を踏ま 新々両校(1)-180P

茶毘元1392^p 轍を踏ま 1700^p
二の轍は決り

1/20^p

H30(2018)2.19(月)~2.25(4回)
H30(2018)12.20(木)~12.20(3回)
令和2(2020)8.25(火)~8.27(4回)

8/27 下 8/26

*

水るところとなつた。
おいでは、秦始皇帝の三の轍を踏まないう
と細心の注意が払われ、その思われ
る。記紀以前の全ての書物・銘のある刀筆が、
数世代もの長期間にわたって保管された後、
密かに抹消された。と考えてみた。
(追って詳述)
世の中の人々に知られないう。

秦・前漢代の洛陽

先述のとおり、
 日史記 卷八、漢高祖

本紀五年五月条の注には、

「正義曰、括地志云、南宮在洛州洛陽縣東北
 二十六里洛陽故城中。輿地志云、秦時已有南北

宮とある。

第十四章 北宮・南宮の項にお

いて既述

すなわち、秦の時、已に、洛陽城中に、南北宮が

有ったとある。恐らく、戦国時代末頃の、名都洛陽城内にはすでに

に南北両宮が存在していたので、その当初から已に南北

宮が有った時代となった。

のだらう。

天つき 269 高皇帝 高祖 劉邦 西暦八一三
おうむ 269 高皇帝 高祖 劉邦 西暦八一三
おうむ 269 高皇帝 高祖 劉邦 西暦八一三

1.122 2058 222 819 1306 1302 新の末ころ
ほうんは 2058 222 819 1306 1302 新の末ころ
ほうんは 2058 222 819 1306 1302 新の末ころ

782 更始年間とある

755 1046 1857

漢の条には、次のような注がなされてい

更始自洛陽而西馬奔舂北宮鉄柱門光武

宮武庫皆未嘗廢蓋秦雖都関中猶放周東都之

制建宮闕於洛陽

洛陽の北宮に鉄柱の門があつたことを伝えて

却非殿に幸して、後漢の首都と定められたの

高皇帝(高祖、劉邦)から新(西暦八一三)

の王莽に上るまでのありだ、未だかつて廢さ

れることになかつたという。(「古代中国の

都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房

八六し八七頁参照)

もの、以下、そのた洋書も省きたい

316
- 25
291
(20)

新(1) 88° 上へ下
云 151°
P 心む 嫌い 避ける
1,124°
「151」 52 24 1178°

HIV

曹魏時代 (二二〇〜二六五)、西晉時代 (二

六五〜三一六) と三代にわたって約三百年間

洛陽は首都としての位置を保つこととなる

(「古代中国の都市とその周辺」服部克彦、

ミネルヴァ書房、八五頁、八七頁参照)

米

後漢の都日雒陽

洛陽を都と定めた後漢の光武帝は、

漢の火徳は水を忌む

と思想から、日洛陽を日雒陽に改め

た。

・「か」曹魏に至ったとき、

魏の土徳は水と合う

とされ、再び元の日洛陽に戻された、とい

う。「北魏洛陽の社会と文化」服部克彦、

ミネルヴァ書房、八頁参照)

また、漢・魏の日雒陽は、司馬氏の

晋代から日洛陽に改められたともいう。(中

国の帝都、村田治郎、綜芸舎、六五頁参照

■とこうで、前漢代の洛陽城内には、南宮

光武帝は、南宮の却非殿に行幸され、遂に

名陽(雒陽)を首都と定められた

と、いうのであるが、この劇的な場面に

注記して、南宮と北宮との関係を、

両宮は相い去ること七里、南宮から北宮

に至るには、中間に大屋が作られ、そこに

道が三つ設けてあり、天子は中央の道を行か

れた

と説明している。中国の帝都、村田治郎、

綜芸舎、五五頁五六頁。五九頁注六参照

■なるほど、七里か南宮のどこから

南宮のどこまでを指すのか定かでないが、

南北に長い九六城(南北九里・東西六里)の宮

城の内の南端と北端部を含む広大な地

域に、南宮と北宮が配置された

ことを示唆しているように思われる。巻頭の

第8図参照

「小町」53p
「新代」(11)-88p 下 42776
H30.2.20

「既述」とも書いて1126p 1056p
1171p 大宮 1127p
1125p

1056p 図

こと

中口の部部5
⑤ $1169 \frac{1}{2}$

同文 (OK)
新和(1)-89^A上

說明 前頁 13 行

卷の第8回
後漢 雒陽城起像図

と説せつ示し
さ水
てい
る
~~て~~
中国の帝都
に
村田 玲郎

綜藝、五六頁參照

なお、皇帝が平素居住する「北宮」と、儀

礼に用いる「南宮」とを、七里もの遠くに

として設けたこの構成は、
ちやうど威陽

1128⁷大屋 1125⁷中井
中井の帝都スケッチ
1124⁷小林
924⁷

1127⁷
「複道」1125⁷109⁷

1074⁷1/2
新

1174⁷1/2

1174⁷1/2

※

宮から渭水を越えた南方に阿房前殿を建設し、
主要な建築間に複道を附設した始皇帝のや
り方と類似しているように感づかれます、と村田
治郎氏はいう。(「中国の帝都」村田治郎、綜
芸舎、五七頁)

(1)とはいえ、
へ周の敬王の時、成周(洛陽)内に「北宮」
と「南宮」が設けられたのだらう。と
考える時、――秦始皇帝が、洛陽を参考
として、咸陽宮の遥か南方に阿房前殿を建設
したのであり、とも思われろ。

なお、複道を南北方向に設置したとき、七里近く
も長々と複道を南北方向に設置したのでは、
九六城と称される洛陽城内が東半分と西半分に両
断され、東の連絡が不可能になるのだらうか
ら、その連絡方法をどう処置したのだらうか
という疑問が起る。複道の建築は北な
くとも二階屋だった筈であるから、あるいは(南北宮
の間)の何処か一場所を限定して、東西へ通
貫ける施設があつたのかも知れない。(「中
国の帝都」村田治郎、綜芸舎、五七頁参照)

1125⁷

1125⁷

岡丘 園1185^P 20294^P 1832^P 新和歌
3874^P 64.302^P 小林
2字を太く 4982^P

行なうための
太極殿

林末の表
建式元平洛陽
1123
16行

年(二六) 春正月 下 太廟・太社を嘗なんだ

南郊の祭天の壇へ洛水と伊水との間に造ら小

丸丘宮城の南正面に位置するを建てた

尙、
 魏書
 掲載
 下
 詔勅
 には、

「昔、漢王朝の初め、秦が学問を滅ぼした」

あとをうけ継いで、~~一~~周代の福^{ふく}郊^{きやう}祖^そ宗^{そう}の礼^{れい}の制

度の不完全な資料を採集して、天地の祭の

制度をととのえた。云々

とある。
三國志 (I) 世界古典文学全集、筑

摩書房の明帝紀第三の六頁の注
とす水は阿丘はすの周代に築か
れたのが未知なり。

また 建武十四年（三八）春正月に

宮前殿きゅうぜんてん（紫宸殿に相当）が新造され、光武席はこの新

宣
居
て
居
た
と
い
う
ん
が
て
い
き
水
本
ち
う
け

後漢書
 卷一百六
 上
 光武皇帝
 第一下
 の中

二年 五七 春正月 条には
 はじめの 土地の神 といふ
 二 五七 春正月 条には
 はじめの 土地の神 といふ
 二 五七 春正月 条には
 はじめの 土地の神 といふ

初立 ハナテ 北交 キタウマ 社毛 シャモウ 土 ツチ 同 ドウ 東夷 トウイ 倭女 ヤメメ 国 クニ 王遣使奉 オウシヤクホウ

倭在帶方東岸大海中。依山島爲匡

とある
ほつこう
後漢書
一、
かみがみ
まつ

北交においで
土地の社々を祭られたこの正月に

東夷の倭女 王が使を遣はして奉前したといふ

＊なお、円丘に於ては、第十八章『冬至の日の、円丘にての祭り』において

考案 ← ④ $1343 - \frac{7}{2}$
 類文 ⑤ $1346^{9} 69 \sim$
 ⑥ $1357^{9} 48 \sim$
 紫宸殿 ⑦ $145^{9} 25 \sim$ 328
 入洛陽
 小町51
 才8回後庚鐘陽

南宮前殿 ④ 1128 黄河の畔 374°
南宮堂後殿 1143°

魏太皇 57°
1.129°

こういふ 中興 24°
光武帝 ④ 844 1/2

後漢書 68°
魏志 18° 41°
歳時 858°
(時折) 1588°
④ 844 1/2
「小町」 31°
④ 778 ④ 844

記録として貴重である。(巻頭の第3表参照)

前漢書 ④ の八地理志・燕地には、

楽浪海中倭人、分爲百餘國、以歳時来

献見云、(史料に見える二つの倭)の項等において既述

と記されてゐる。(岩波文庫 四三七の九頁、第八章 漢文)

前漢代にすでに、楽浪海中の百余国の内の

一小国曰倭国に、歳時を以て(時折)貢献

を繰返してゐたのであろう。思われる。(第4章 遣

使ともあれ、光武帝は中元二年(五七)春正月に

雒陽の都の北郊において土地の神々を祭る儀

式をすませた後、倭の奴国の王が遣わ

した使者の朝貢を受け、大海を渡つて来た多

大の労を御ねぎらわれたのとであらう。

と想像される。

●ところが、その直後(翌月)の二月、光武帝は南宮前殿

において崩じた。時に、六十二歳だったと

いう。(「中国の都市とその周辺」服部克彦

ミネルヴァ書房、八八頁参照)

1349
 155-1/2 洛陽からここへは 90°
 城門表 古代中の都市とその周辺 90°
 後漢書(朱) 7, 409°

1.130 P
 丁亥八尾系と同じく
 232, 2254
 41 km²
 全人口約 257, 547 戸
 8.35m
 51, 460, 000 m²
 9, 500, 000 m²
 41, 960, 000 m²
 41, 960, 000 m² / 200, 000 戸 = 209.8 m²/戸
 1478 戸 196 m²/戸

このよう な 推測をするとき、
 後漢代
 都と 雒陽城 (いわゆる九六城) 約三
 約六・二 × 約二・五 をとり 囲む 最外 外郭城
 前漢代とは比較にならない多くの人が住むよ
 うになっ ていて、 河南尹の戸数、二
 十萬 八千 余戸のうちの大 半が、この最外 外郭城内
 (宮城域・市場・道路・諸施設を除いた部分)
 大 軒を 運 に あった のであらう。 と思われ
 る。 ざっ と 計算 すると、一戸 平均、十ト × 十ト
 の 広さ くらい だった ように 思 わ れ る。
 *
 雒陽の宮城に設けられた城門につい
 て みて みる こと に よう。 後漢代の城門は、
 どの よう に 配置 されて いた のであらうか。
 後漢書 卷 二十七 卷 下 百官志、四、城門 校
 尉の条によると、
 南面に正門と 七の平
 門があり、これを 始め として、 合計 十二の
 平城門ともいう

①1350^P 1358^P-2/2
 ②1056の図
 ③1349^P ④1056の図 ⑤1155^P ⑥1155^P ⑦1155^P ⑧1155^P ⑨1155^P ⑩1155^P ⑪1155^P ⑫1155^P ⑬1155^P ⑭1155^P ⑮1155^P ⑯1155^P ⑰1155^P ⑱1155^P ⑲1155^P ⑳1155^P ㉑1155^P ㉒1155^P ㉓1155^P ㉔1155^P ㉕1155^P ㉖1155^P ㉗1155^P ㉘1155^P ㉙1155^P ㉚1155^P ㉛1155^P ㉜1155^P ㉝1155^P ㉞1155^P ㉟1155^P ㊱1155^P ㊲1155^P ㊳1155^P ㊴1155^P ㊵1155^P ㊶1155^P ㊷1155^P ㊸1155^P ㊹1155^P ㊺1155^P ㊻1155^P ㊼1155^P ㊽1155^P ㊾1155^P ㊿1155^P

城門があったという(既述、巻頭の第8図参照)

・そして、こ水う十二の城門名は、後世の
 記録を参考に「て配置すれば」宮城東面の北
 頭の隅から順次時計回り方向に、次のように
 並んでいたと考えられる(巻頭の第8図参照)

東面 上東門・東中門(中東門)・望京門(耗門)
 南面 開陽門・平門(平城門)・小苑門(苑門)・津門
 西面 廣陽門・雍門・上西門
 北面 夏門・穀門

また、後漢時代の「雒陽城」城内に二十四

の街があったと、そして、各々の街には、治安板

十二門、各々には、亭が置かれていた

れていたので、必要欠くべからざるものであった。

第四図へ洛陽宮城門想像図(参照)

には、後漢の首領として、雒陽城西部地区

仏教の伝来などに関し、幾多の物語りを今

りである。

城門表 東經 819° 係國朝貢 57年。
洛陽 472 記 75 下來 ~
④ 1155 $\frac{1}{2}$ 年 在 25 257

1132⁹

参照

に伝えられている。(「古代中国の都市とその周
辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、九〇一九一
頁参照)

参考までに、^{ろやうがえんき}洛陽伽藍記^{（第238回図参照）}巻四、城西へ
^{はくばい}白馬寺^{（条を引き写しておこう）}を引きたり。
「白馬寺は、漢の明帝^{めいてい}（後漢第二代の皇帝^{こうてい})
（在位五十七五）によつて建てられた。

仏教が中国へ入った始めである。
寺は、西陽門^{せいようもん}（北魏代の宮城西面、南から
二番目の門）の外三里の、御道の南にあった。

帝（明帝）は、金神を夢に御覧になつた。
その背だけは一大六尺、項と背には日月が
光り輝いてゐた。

それは胡の神で、仏というものだつた。
帝は、使者を西域に遣わして求めさせ、か
くて仏經（仏教の経文）と仏像を得た。

この時、白馬に仏經を背負わせて帰つたの
で、それでこゝ（白馬寺と）名づけられたのである。

という。（「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文
学大系、平凡社、七五七六頁。八八頁注一ハ

みはえ 元
見映 2129°
云 485°

1,133 P- 1/2

9月11日 1124°

1131° 19分

1155° 1/2
1132° 7分

1158° 3/4
1159° 3/4
1187°
宮城の正門

後漢時代の雒陽の宮城南面の正門

それにも、なんと奇妙に思えること
がある。

①後漢時代の雒陽宮城の南面には、東から西へ、
日開陽門、日平城門、日小苑門、日津門、という四つの門があつた。

②この四つの門のうち、東から二番目の平城門が

城門として正門とされた。
（第十四章 後漢の都 雒陽）

陽の項において既述

も、単純に、
宮城南面に、見映えよく、四つの門を等

間隔に配置した。
とすれば、正門である日平城門の位置は、

おひびん東寄りにあつたことになる。

ひいては、宮城内の王宮も、かなり東へ寄つたところにあつたことになる。

しかし、決して、そんな筈はあるまい。

めれる。

定かでないが、この物語では、
 宮城の正門曰平門（平城門）は、
 南面の中央にあつたのだらう。
 と仮定してみた。（巻頭の第8図参照）
 もしかしたら、次のような経緯があつたの
 かも知れない。巻頭の第6図と第8図参
 照）
 周公旦が築いた成周城内の内城曰洛邑の
 南面には、三つの門があつて、中央の門曰阜
 門曰正門とされたように観察される。
 また、周の敬王の時、正方形から九六城へ
 拡大されたとはいへ、この頃にもまだ、宮
 城（九六城）の南面には三つの門が配されて
 いたのではなからうか。
 ところか、それ以後、いつなのか不明なが
 ら、宮城南面の中央の正門と下
 西端の門との間に新たに一つの門が追加さ
 れたのであらう。

なお、
 へ追加されたその門は、従来からあつた他
 の門より幾分、いくぶん小さかつたので、

天の
改行

1.134^p

小北 51^p 8日

12.5^{OM}

後漢時代当時 日苑門と名付けられたに
もかかわらず、日小苑門とよ呼ばれた
と想像される。

より詳しく述べると

後漢時代の雒陽宮城十二門のうち、日苑
門はつまり宮城南面の正門、日平門の西隣
りに追加された門のみ、基壇の無い少々小
さな門とされ、馬車の通用門として用いられた

のではあるまいか

つまり、他の十一門はみな基壇上に高く聳

え立っていたのに、日苑門だけが

少一ばかり低く、日苑門と見えたのたう。

③そこで人々は日苑門を、日小苑

門と呼びならぬようになった

と察せられる。

(*)

敬王 ⑩1041"-3/2 P
之内は馬車用⑩1056 ④

世界の歴史
唐とインド

船石回

船名
元 7057

1836' 189年
⑤ 1003

 $p - 1/2$

同文,
 ⑤ 1003 $\frac{1}{2}$
 ⑥ 1001 P

同文,
 ⑤ 1003 $\frac{1}{2}$
 ⑥ 1001 P

1.136

HIV 有樣 迎 迎 5 个

三國志工部 12^P 三國志工部 105^P

12^D

π_{264}

後漢(二五〇)の首都としての

碓陽炎上

雒陽（ロウヤウ）の街（まち）の繁栄（はんえい）は久（ひさ）く続（つづ）いた

ところかゝる一八四年、黄巾の乱が勃発し、
石のように堅固に見えた漢帝国が、大きく揺

らぎはじめた。

後漢は、あらん限りの力をこめて絞って

こ水を鎮圧したか、
ー
ー
ー
かし、
その余波

は、押しとめ得ないまで⁶²²のもの⁶²³な⁶²⁴って⁶²⁵い

第十三章の冒頭において既述

『三國志』(吉川英治著)には、この当時

の様子が大略次のように記されてゐる。

漢室万歳

陽軍万歳

朱高しゅこう大將軍だいしやうぐん萬歲ばんざい

南陽(河南省南陽県)の諸軍もこごとごと

く平定した

彼が
の
大賢良師張角
(賊の総大将)
が戸毎に貼

うせた黄いろい呪符もすべて剥がさるゝ
黄

巾の兇徒は、まゝたく影を潜め
 万戸泰平を

謳歌おうかするかに思われた。

お、次々3行

世界の史

1.137

1130

20万

世界の史4巻と5巻

中国の歴史58 古史の一周1256

4万戸 吉川英治(生) 349 1002

花うさぎと15 華平と燃入

22月

3巻

212

昔の歴史 1236 炎上 253

※1行あける。

FL

示つき改行

改行

改行

改行

凡社、一二九頁へ「元氏を送る」曹植参照

くうた、た「漢・魏・六朝詩集」(16)平

FL 曹植は、このころの有様を次のよう

インド、中央公論社、五頁参照

と書き「世界の歴史」(4)唐と

は鶏太の鳴き声もきかれぬ荒涼たる野となつてま

は積人で路上にみちる「と書き」雒陽の都

落伍し絶命する老少男女市民があいつぎで史書は「屍

人へと移っていった。この強行軍にたえかね、

げ出した後漢最後の天子献帝のあとを追ひ、長

安へと移っていった。この強行軍にたえかね、

屋將軍董卓が「雒陽城の内外を」とい

雒陽は「昔日の影なきものとなった

その「初平元年(一九〇)三月、残忍な殺し

もの「焼き払ってしまった

この後「後漢末の混乱はいよいよ激しく

雒陽城の内外を「と

雒陽は「昔日の影なきものとなった

その「初平元年(一九〇)三月、残忍な殺し

もの「焼き払ってしまった

この後「後漢末の混乱はいよいよ激しく

曹植は魏の人だから

OK 洛陽

前頁へ

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

1828

徒歩で北芒の坂に登り
遙かに洛陽の山やまを眺める
洛陽のまちのなんと寂しいこと
宮殿はすべて焼きはらわれ
垣や塀はことごとく崩れ裂け

中略

荒れた田畑はうち捨てられたまま
異境に長くいた旅人には
東西の識別もつかぬであろう
みはるかす原野はすさまじく

千里のありだ 炊ぐ煙も見えない(以下略)

この当時、郭門を入って故の里閭(故郷。里
は二十五家の部落、閭は里の門)へ還ろうと
思っても、一面の焼野原となっており、
どう帰ってよいのかわからなかったという。

漢詩 藤野岩谷 去者日以疎 (古詩十九首 参照)

集めた 雒陽の都は、後漢二百年の命脈と共に

あえなく散りはててしまった。(古今中国の都市とその周

迎服部克彦、ミネルガ書房、九一頁参照)
後漢末ころの名所は、東西・南北それぞれ、四本の小路で二十五に分
けられていたのだからか。(詳細は不明)

1356
15行
136P

新刊 1-220P/16と分り
お代りの一冊 91P
25~220P
旺文社 旺文社 旺文社
1182

後漢 160
1.138P
旺文社 旺文社 旺文社
1182

下

⑤ 1141P
P 延壽 } 22.0%
1008 1/2 黃和 }
11行

1.139P

H18. 10. 21 (土) 9:40
東洋史行 819
190年 ⑤ 1138
洛陽 魏
未定
(208)

東洋史年819

和の市 58°

22日(表参照)

⑤ 1138^P 数日

述) 田治郎、綜芸舎、五八頁参照。第十三章八三
 国鼎立、そして洛陽の復興の項において既

米

45111
⑥ 1003 125